

東京都立埋蔵文化財調査センター 令和4年度企画展示



境道恵

— 多摩丘陵の3つの顔 —

Boundary/Road/Resources
3 faces of Tama Hills

東京
Tokyo

多摩センター
Tama Center

2022/3/22(Tue)—2023/3/9(Thu)

@東京都立埋蔵文化財調査センター展示ホール

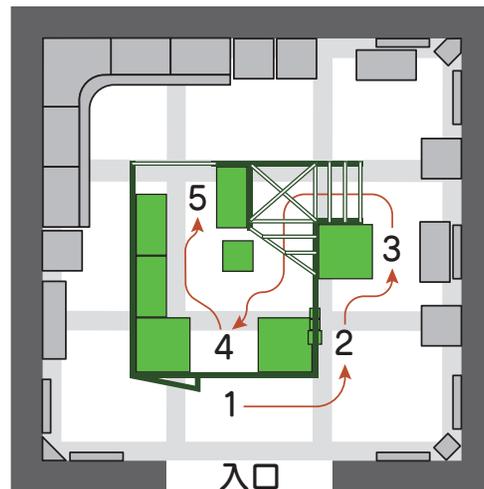
解説冊子

- ・この冊子は、東京都立埋蔵文化財調査センター令和4年度企画展示『境・道・恵 - 多摩丘陵の3つの顔』の解説冊子として作成しました。
- ・本展示では多摩丘陵のうち北部の多摩ニュータウン地域を中心とする地域を対象とします。
- ・遺跡名の「多摩ニュータウン」は、「TN」と省略して表記しています。
- ・この解説冊子で取り上げた遺物・写真資料は、東京都立埋蔵文化財調査センターに所蔵されています。
- ・キャプションに★印を付した地図は国土地理院のウェブサイト提供の航空写真・基盤地図情報を用いて作図・加筆したものです。
- ・この企画展示は、東京都教育委員会の協力により開催しています。

展示の構成

1. 導入
2. 境
3. 道
4. 恵
5. 近世以降、そして現代へ

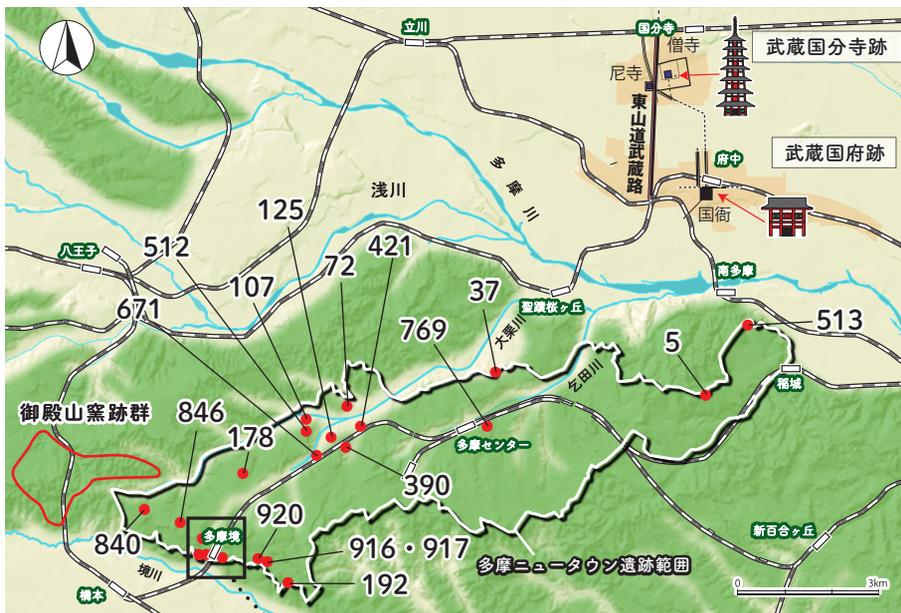
- 企画展示
- 常設展示



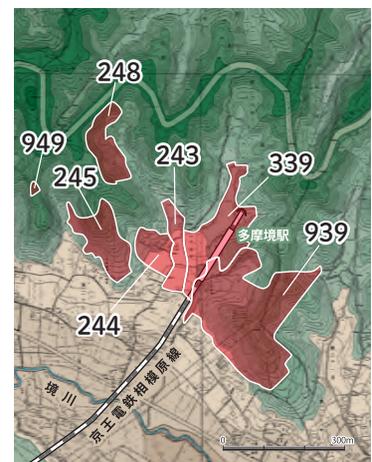
展示室の順路

取り上げた主な遺跡

この解説冊子に登場する主な遺跡の位置を図に示しました。多摩境駅周辺は遺跡数が多いため、別に拡大図を添えています。数字はTN遺跡番号を示します。



多摩ニュータウン範囲 (国土地理院地図に加筆)



多摩境駅周辺の拡大図

境・道・恵—多摩丘陵の3つの顔

平野の果てに現れる複雑に入り組んだ丘や谷。
多摩丘陵は、東京と神奈川を隔てる境界にあたっています。

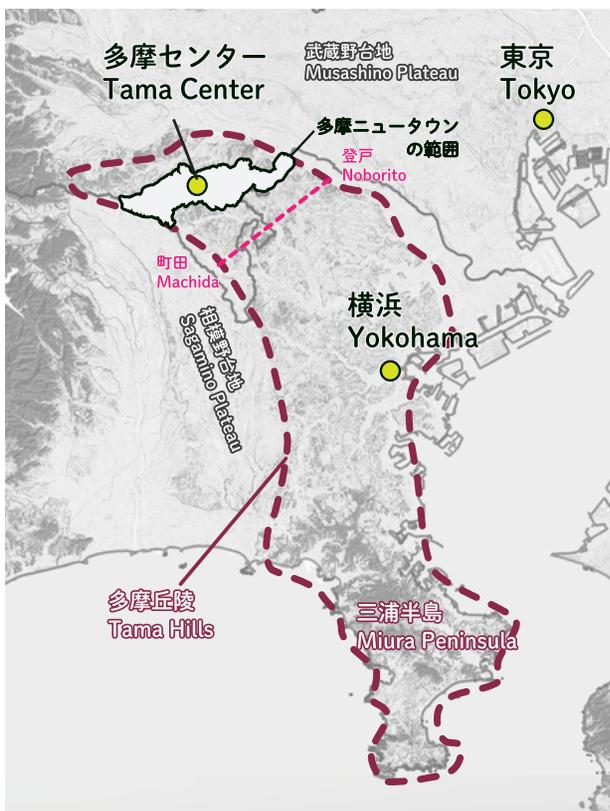
丘陵は人々を隔てる境界＝「境」である一方で、
時に人々はそこに交通路＝「道」を見出して離れた地域をつなぎ、
また秘められた豊富な資源＝「恵」を求めて集うこともありました。

多摩丘陵が見せる3つの顔に人々はどのように向き合い、関わってきたのか。
本展示では多摩ニュータウン地域を中心にその多様なあり方を探ってみたいと思います。

Complexly intertwined hills and valleys of Tama Hills are at the border of Tokyo and Kanagawa. Hills are indeed the "boundary" that separates people of the both sides. However, people sometimes opened "roads" in the Hills to connect distant areas, and at other times, they dared to go deep into the Hills for hidden rich "resources". How have people accommodated themselves to, and sometimes utilized the three faces of Tama Hills: Boundary, Road, Resources?

In this exhibition, we would like to explore the diverse ways of people-land relationship in the Tama New Town area.

本展示の舞台



多摩丘陵と多摩ニュータウンの位置 ★

多摩丘陵と多摩ニュータウン

多摩丘陵は武蔵野台地と相模野台地の間に位置する丘陵地帯であり、南端は三浦半島とつながっています。地形の成り立ちの差異により、概ね現在の町田と登戸を繋ぐ線で南北に分けられますが、本展示で主に扱うのは多摩丘陵北部、特に当センターの位置する多摩ニュータウンの範囲が中心です。

イルカの形に例えられることもある多摩丘陵。多摩センターの位置はさながら「イルカの目」です。



実は「イルカの目」を意識している表紙デザイン ★

多摩丘陵の地形とその形成

Geography of
Tama Hills

むさしの さがみの
武蔵野と相模野という2つの台地を隔てる丘陵。

この特徴的な地形こそが、多摩丘陵地域の個性的な歴史を育む場となりました。

歴史を知るためにはまずその背景を知らなければなりません。多摩丘陵の地形はどのように形成されたのか？ここでは百万年を超える地形の物語を見ていきましょう。

The characteristic topography of the Tama Hills nurtured the area's unique history.

To deeply understand the past of an area, we have to know its geographical traits. How was the landscape of Tama Hills formed?

To find out, let's take a look at the story of the geography over a million years.

関東造盆地運動

関東地方では約200万年以上前から東京湾などの平野中心部が少しずつ沈み、逆に周縁部が高くなるという地質現象が続いています（関東造盆地運動）。武蔵野台地と相模野台地を隔てる丘＝多摩丘陵ができたのも、この運動が一つの要因です。



↑ 隆起している
土地

↓ 沈降している
土地

隆起点・沈降点については時代による変化もあり本来は複雑だが、ここでは単純化した形で示した。
貝塚 1981「東京の自然史（増補第二版）」をもとに作図

関東造盆地運動イメージ ★

侵食の進行と丘陵の形成

多摩丘陵は武蔵野台地と相模野台地に比べて谷が入り組んだ複雑な地形をしています。これにも理由があります。

多摩丘陵を含む関東平野は50万年以前にはほとんどが海の下にありましたが、陸からの土砂が積もることで少しずつ陸地化していきます。多摩丘陵は相対的に標高が高いため早くに陸地化し、水によって土地が削られることで複雑な谷が形成されたのです。



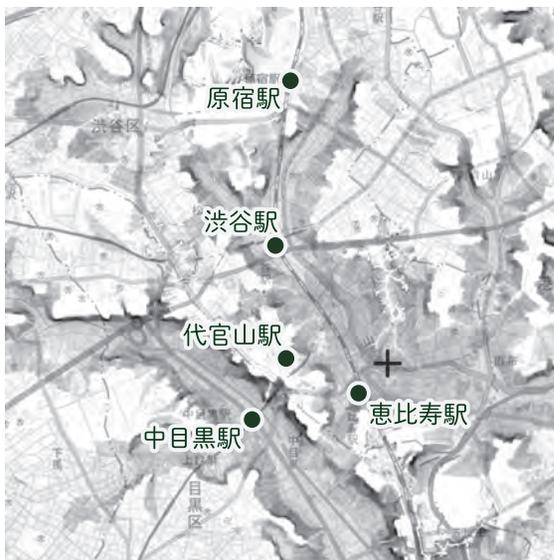
多摩センター周辺 (多摩丘陵)

多摩丘陵と武蔵野台地の地形対比

左に載せた3つの地形図は、上から下へ陸地化した時期が新しくなります。

海底では土砂等がなだらかに積もっていくため、陸地化した直後はほぼ水平な地形が広がることになります。

一方で陸地化後は雨が降ることで地表に川が形成され、地形を削って谷を作ります。谷に露出した地層からは地下水が染み出し、それがまた川を作ることで、陸地化した土地には徐々に鹿角状に谷が入り組み、地面が削られることで平地の面積は少なくなっていきます。



渋谷 - 恵比寿駅周辺 (武蔵野台地)

陸地化した時期の古い多摩丘陵（最上段）では谷が何重にも入り組み、平地の面積はかなり少なくなっています。中段の渋谷駅周辺は、平地部分もそれなりに残っていますが谷もかなり発達し、地形の凹凸が目立ちます。最下段の小平駅周辺は陸地化の時期が最も新しく、北東の黒目川が形成した谷等を除いてはほぼ平坦な土地が広がっていることがわかります。



小平駅周辺 (武蔵野台地)

※各図とも国土地理院地図から作成。アジア航測株式会社の赤色立体地図作成手法（特許 3670274、特許 4272146）を利用している。

境 Boundary

多摩丘陵は、武蔵野台地と相模野台地を分け隔てる「境」となっています。
平坦な台地を歩んできた人々にとって、多摩丘陵はあたかも移動をさえぎる壁のように感じられたかもしれません。

特に、西からきた人々が丘陵の縁で歩みをとめてしまったかのような現象がさまざまな時代に見られます。

ここでは、縄文、古墳、古代という3つの時代の例をご紹介します。

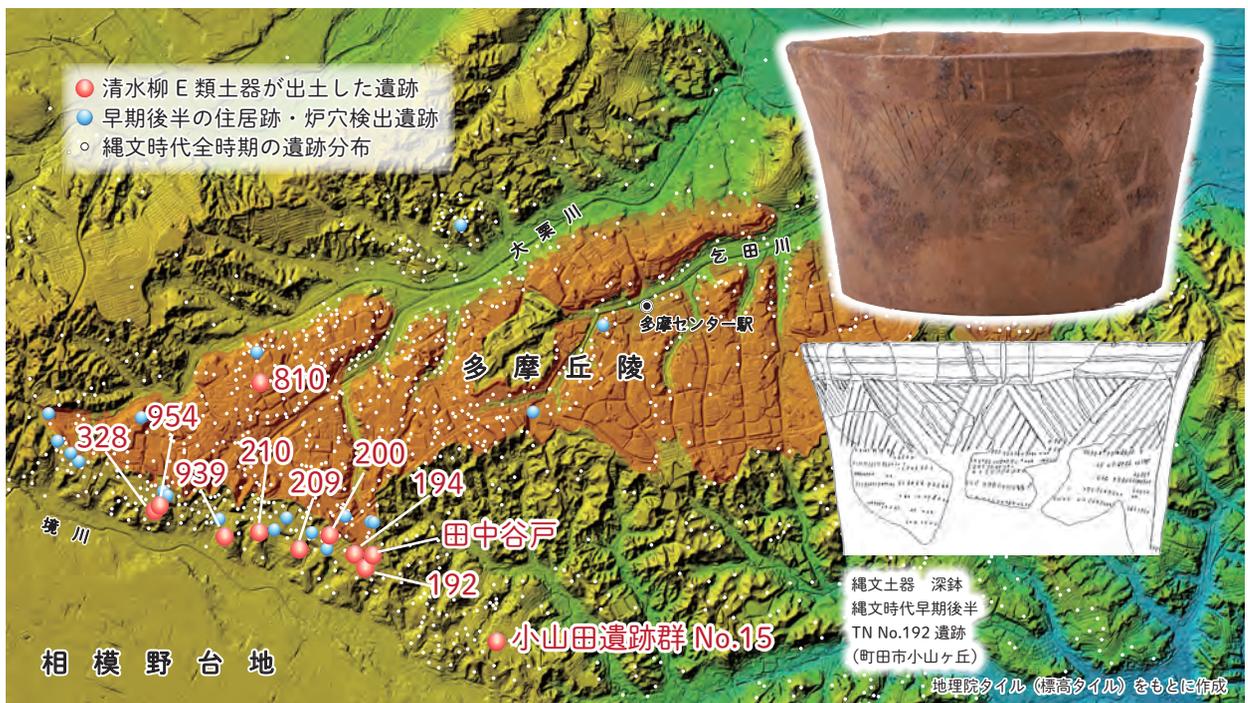
Tama Hills is the "boundary" that separates the Musashino Plateau from the Sagami Plateau.

For people who had walked through the flat plateau, the Tama Hills may have seemed like a wall that blocked their path. Through the history of the Hills, we can repeatedly see one curious phenomenon: People coming from the west seem to have stopped their way at the edge of the Hills.

Here are the examples from three periods: Jomon, Kofun, and Nara period.

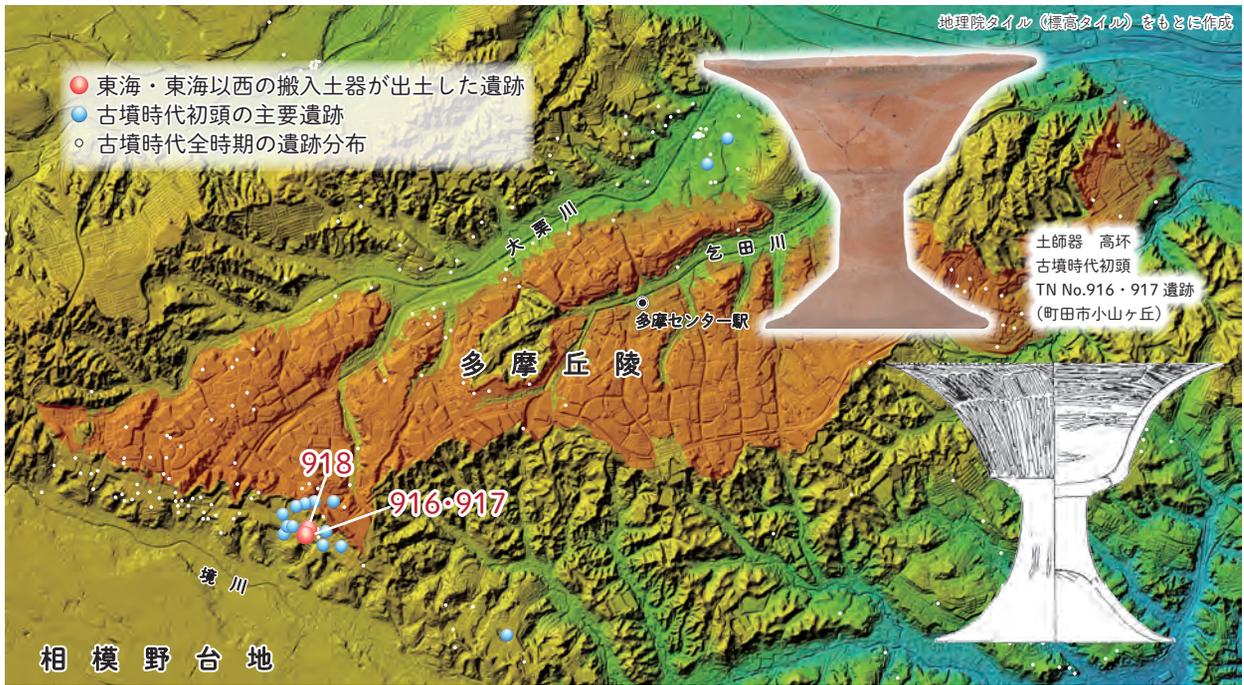
縄文時代

縄文時代の早期後半(約8,500年前)の時期に、「清水柳E類」と呼ばれる土器が現れます。この土器は、絡条体圧痕(棒状の軸に絡めた縄(条)を押し付けたときにできる痕)と呼ばれる縄目の模様を付けることが特徴で、静岡県東部から神奈川県を中心に分布します。多摩丘陵では、TN No.192遺跡をはじめとする遺跡で見つかり、丘陵の縁に位置する町田市相原・小山地区周辺に分布がとどまる現象が見られます。



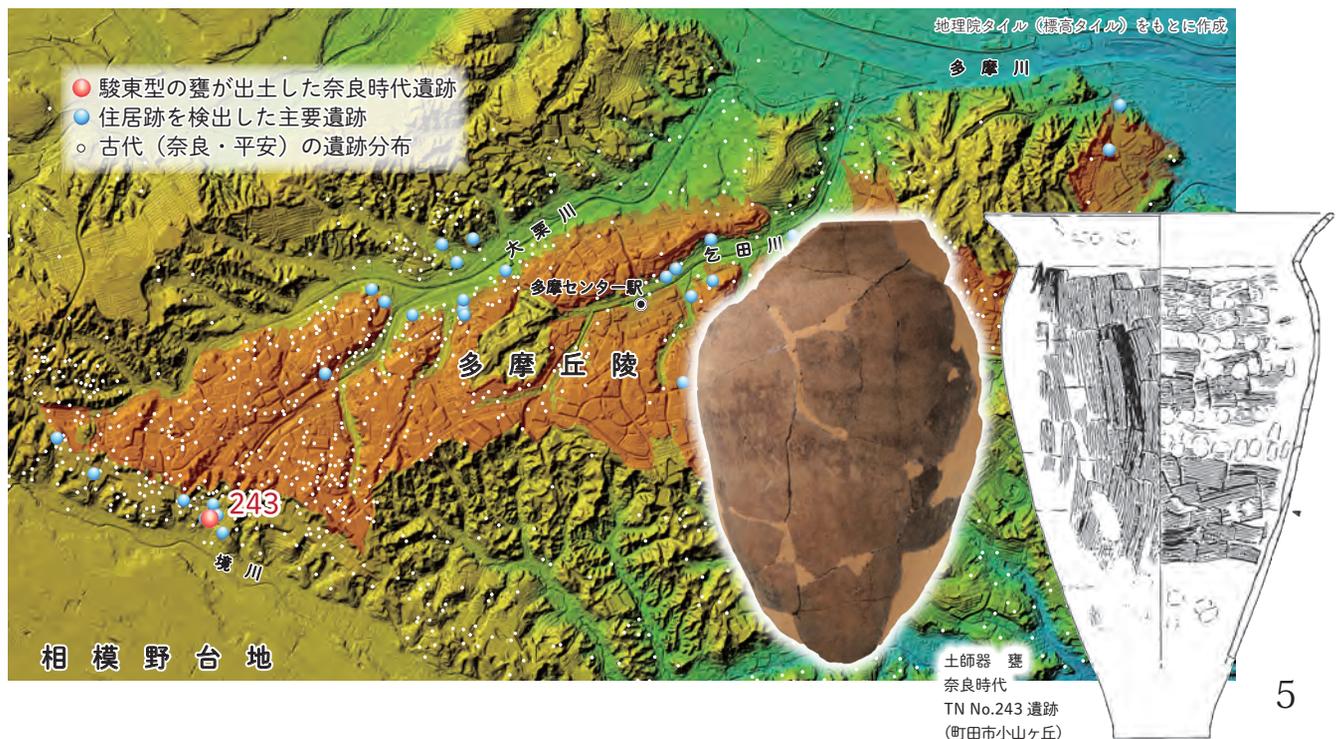
古墳時代

弥生時代末期から古墳時代前期という時代の過渡期にあたる古墳時代初頭（約 1,650 年前）では、特に町田市相原・小山地区で遺跡が集中して見つかっています。この中で、TN No.916・917 遺跡では東海地方西部、TN No.918 遺跡では畿内や伊勢湾方面で作られた土器が見つかっています。これらの土器は、西から来た人々と共に搬入されたものと考えられますが、平坦な相模野台地の先に現れた多摩丘陵を前に歩みを止めたのではないのでしょうか。



古代

奈良から平安時代の頃（約 1,300 ～ 1,000 年前）には、多摩丘陵の内部にも遺跡が分布します。しかし、相原・小山地区に所在する TN No.243 遺跡では「駿東型」と呼ばれる胴部が大きくふくらみ、内側には指で押された痕跡が際立って残されている土器が見つかっています。この特徴を持つ土器は、静岡県東部地域を中心に広がっています。この土器もまた、西から移動してきた人々によって運ばれてきたもので、丘陵の縁でとどまり、丘陵内部の遺跡からは見つかりません。



道 Road

人々は丘陵を前に足を止めてばかりいたわけではありません。

さまざまな時代、さまざまな地域から丘陵に足を踏み入れる人々もいました。彼らは離れた場所のモノや情報をもたらし、丘陵はそれらをさらに別の場所へと送り出す出発点になることもありました。遺跡の出土品からは、人々が丘陵を複雑に行き来する様子をうかがうことができます。

異なる地域の人々が行き交い、出会う場所。丘陵の「道」としての顔です。

People didn't just stop their walk in front of Tama Hills. At different times, from different areas, people walked into the Hills. They brought various goods and information from distant places, and sometimes the Hills was the starting point for sending those to yet other places.

We can glimpse how people came and went in the hills from the artifacts excavated from archaeological sites. The place where people from different regions come, go and meet with each other. That is the other face of Tama Hills: "road".

黒曜石と翡翠の道

縄文時代の人々にとって、黒曜石は石器の材料として欠くことのできないものでした。また、美しい翡翠は大変貴重なもので、遺跡から出土すること自体が稀です。どちらも産地が限られ、特に翡翠は日本中でも北陸など数箇所しか得られません。

縄文時代中期には、北陸の翡翠と中部高地（長野）の黒曜石を関東地方まで運ぶ「道」が成立しました。フォッサマグナ西縁の谷沿いに、新潟県の糸魚川から諏訪湖を経由して関東各地へ至るルートです。

多摩丘陵はその「道」の中で重要な拠点となっていたようです。丘陵の中心的なムラである TN No.72 遺跡からは、大珠と呼ばれる翡翠製品が複数見つかっています。



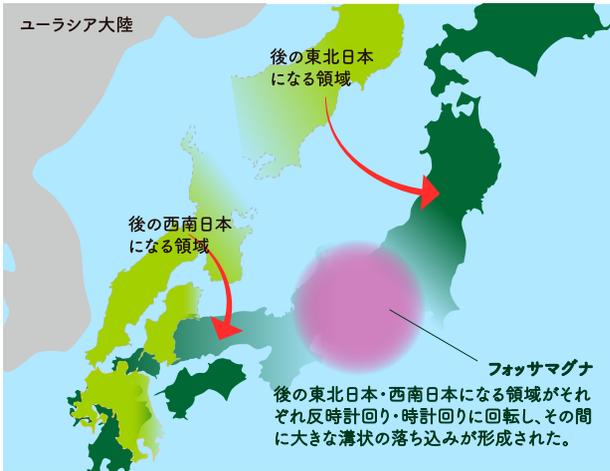
黒曜石と翡翠の道 ★

翡翠大珠 4点
縄文時代中期前半
TN No.72 遺跡
(八王子市堀之内)

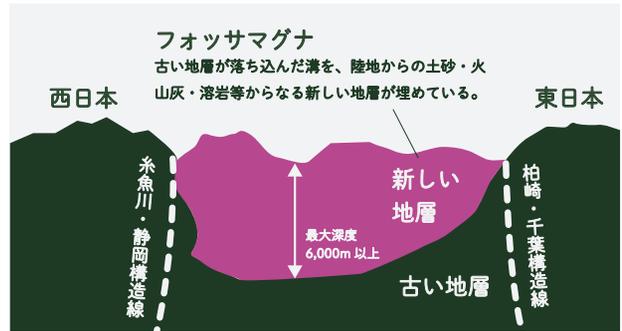


フォッサマグナ

約 1,500 万年前ごろから、それまで直線上に並んでいた日本列島は、中央部が裂けて沈むようにして歪んでいき、現在に近い形になりました。沈んだ部分に当たるのがフォッサマグナで、新潟から静岡・千葉まで、深さ 6km 以上の大きな溝状の地形を、土砂や火山の噴出物等が埋めています。フォッサマグナ西縁はユーラシアプレートと北米プレートが衝突する地帯にあたり、翡翠と黒曜石の道はそこに形成された断層の谷を利用しています。



a. 日本列島の回転運動とフォッサマグナ形成



b. フォッサマグナ断面イメージ（南側から見る）



c. フォッサマグナと「黒曜石と翡翠の道」★

図 a は日本地質学会 2008「日本地方地質誌 3 関東地方」、

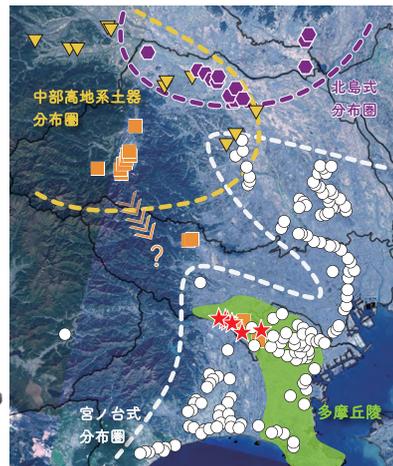
図 b・c は <https://www.pref.niigata.lg.jp/uploaded/attachment/196705.pdf> を基に改変・作図

『境』を越える『道』

約2,000年前、境川を臨む多摩丘陵西縁に住んでいたのは、東海地方の影響の強い宮ノ台式と呼ばれる土器を主に使う人々でした。しかし彼らの残した遺跡からは、長野や山梨等、山を隔てた中部高地系統の土器もわずかながら見つかります。さまざまな地域を結ぶ「道」が「境」を越えて通じていたことをうかがわせます。

さまざまな地域を結ぶ道

弥生時代中期後葉の中部高地系の土器分布は北西方面から多摩丘陵に及びます。



石川・柿沼・宅間 2017「ときがわ町破岩遺跡」『埼玉考古』52
石川 2011「9 関東地域」『講座日本の考古学 弥生時代(上)』を基に作図

- 宮ノ台式
 - ◇ 北島式
 - ▽ 栗林式系
 - 下ッ原式系
 - ★ 多摩丘陵北西部 宮ノ台式が主体だが中部高地系土器が交じる遺跡
- 中部高地系土器

関東地方 西部弥生時代中期後半の遺跡分布 ★



甕(宮ノ台式)
弥生時代中期後半
TN No.939 遺跡
(町田市小山ヶ丘)



壺(宮ノ台式)
弥生時代中期後半
TN No.920 遺跡
(町田市小山ヶ丘)



甕(中部高地系)
弥生時代中期後半
TN No.939 遺跡
(町田市小山ヶ丘)



壺(中部高地系)
弥生時代中期後半
TN No.920 遺跡
(町田市小山ヶ丘)

弥生時代後期の道

弥生時代後期になると鶴見川流域(現在の横浜市域)で中部高地の影響を受けた朝光寺原式土器が成立します。こちらは北上して多摩ニュータウン付近にまでもたらされます。



甕(朝光寺原式)
弥生時代後期
TN No.920 遺跡
(町田市小山ヶ丘)



甕(朝光寺原式)
弥生時代後期
TN No.846 遺跡
(八王子市鎌水)

武相国境の土器たち

古墳時代末期以降、全国が律令（法律）によって「国」という単位に分割されましたが、国の境は活発な人の動きを止めることはできなかったようです。多摩丘陵からは武蔵国と相模国のもを中心として多様な土器が出土し、丘陵の「道」を人々が盛んに行き来していたことがわかります。

律令で設けられた各「国」は五畿七道という更に大きな行政区画に所属させられ、各道にはそれぞれに所属する国をつなぐ公道が設けられました。武蔵国はもともと長野・群馬・栃木等を通る東山道に所属しましたが、771年には東海道に属することになりました。これにより丘陵には相模国から武蔵国へ至る「道」が正式に通ることになったのです。

古代武蔵国・相模国の土器型式

かめ 甕			つき 坏	
さがみ 相模型	むさし 武蔵型	ぶそう 武相型	相模型	南武蔵型
板状の工具で胴部をなでてなめらかにしている	器壁が薄い色は赤褐色	器壁は厚い色は黄褐色	へらのような工具で削って形を整えている	指で押さえて形を整えた跡が残る
甕（相模型） 奈良時代 TN No.243 遺跡 （町田市小山ヶ丘）	甕（武蔵型） 奈良時代 TN No.769 遺跡 （多摩市豊ヶ丘）	甕（武相型） 奈良時代 TN No.939 遺跡 （町田市小山ヶ丘）	坏（相模型） 奈良時代 TN No.512 遺跡 （八王子市松木）	坏（南武蔵型） 奈良時代 TN No.512 遺跡 （八王子市松木）

武蔵国府までの東海道ルート

地質の違いから、多摩丘陵は町田ー登戸を結ぶ線の南北で多摩1面と2面に分けられます。相模を経て武蔵国府に至る東海道は、多摩丘陵を越える際に傾斜の緩やかな多摩2面から入るようにルートをとっています。

※東海道への誘い <https://www.ktr.mlit.go.jp/yokohama/tokaido/index.htm> を元に加筆 ★



恵

Resources

丘陵の複雑な地形は、豊富な水、生き茂る木々、粘土など数多くの資源をたたえていました。多摩丘陵はそうした「恵」を求めて人々がやってくる場所でもあったのです。

人々は丘陵の恵みを活かした生業を営み、土器、木器、鉄など、さまざまなモノを作り出しました。

多摩丘陵の3つ目の顔に、光を当ててみましょう。

The complex topography of Tama Hills was rich in various "resources" such as abundant water, lush trees, and clay. The Tama Hills was also a place where people gathered for those resources. People utilized resources of the Hills, producing various things such as iron, pottery, woodenware. Let's shed some light on the genial face of Tama Hills. That is its third aspect: "resources".

粘土が採れる丘

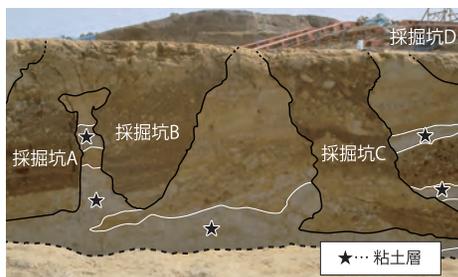
多摩丘陵では、やきものづくりに適した性質の粘土が採れました。斜面地では粘土層が地表から近いので、採掘もしやすく、さまざまな時代の粘土採掘坑が見つっています。丘陵ではこの恵みを活かし、縄文土器や古代の瓦などのやきもの生産が活発に行なわれていました。

縄文時代の粘土採掘坑

TN No.248 遺跡（町田市小山ヶ丘）では、全国でも例を見ない大規模な縄文時代の粘土採掘坑が見つっています。2,405㎡の調査範囲からは少なくとも635トン（オスのアフリカゾウ約100頭分）にも及ぶ粘土が1,000年以上にわたり採掘されたと見積もられています。



広い斜面にいくつも掘られています



粘土層をねらって採掘しています

遺跡を越えた石器

この石器は土を掘る道具と考えられています。

基の部分（もと）がTN No.248 遺跡の粘土採掘坑から、刃の部分（は）がTN No.245 遺跡の住居跡内から出土したことで、TN No.248 遺跡の粘土は、土器作りのムラであるTN No.245 遺跡の人々によって掘られていたことが証明されました。

基部
↑
↓
刃部



打製石斧
縄文時代中期後半
TN No.245 遺跡
TN No.248 遺跡
(町田市小山ヶ丘)

縄文土器づくりのムラ

土器は粘土で形作られ、最後に焼くことで完成しますが、TN No.245 遺跡の 51 号住居の床からは、焼く前の土器（未焼成土器）と土器の製作台（器台）が並んで出土しました。前者は模様付けまでされており、あとは焼くだけの状態でした。

未焼成土器は倒れて割れたような状態で見つまっているため、もとは隣の器台の上で焼成前の乾燥を行っていたのかもしれませんが。縄文土器づくりの一場面をとらえた、貴重な事例です。



未焼成土器
縄文時代中期後半
TN No.245 遺跡
(町田市小山ヶ丘)



器台
縄文時代中期後半
TN No.245 遺跡
(町田市小山ヶ丘)

もしも完成していたら…

右に示した2つの縄文土器はどちらも「曾利式」と呼ばれるもので、縄文時代中期後半に作られたと考えられています。模様などの特徴から未焼成土器も曾利式と考えられるため、こちらも縄文時代中期後半に作られたと推定できます。



古代の窯業生産

奈良時代には、多摩丘陵の各地に瓦や須恵器を焼くための窯が造られます。やきものや窯を作るための「粘土」、窯を造るのに適した「斜面」、焼成に必要な「木材資源」というように、多摩丘陵にはよい条件が揃っていたのです。

他国にも流通した丘陵の須恵器

平安時代に操業を始めた御殿山窯跡群（八王子市・町田市）の須恵器は、南武蔵のみならず、相模国、そして甲斐国でも使われていました。



須恵器 坏
(御殿山窯跡群産)
平安時代
TN No.939 遺跡
(町田市小山ヶ丘)

国分寺創建を支えた瓦窯

稲城市大丸地区の窯では、奈良時代に創建した武蔵国の国府・国分寺に提供する瓦を焼いていたことが明らかになっています。



榛沢郡
↓
榛出
↑
多磨郡

瓦
奈良時代
TN No.513 遺跡
(稲城市大丸)

郡名と推測される文字が記されています。多磨郡にあった TN No.513 遺跡は他郡からの依頼で瓦を焼いていたと考えられます

豊かな木材のある森林

かつて、多摩丘陵には主に落葉広葉樹と常緑広葉樹から成る豊かな森林があり、そこから得られる豊富な木材も人々にとって重要な恵みでした。建築材料として、炭の材料として、木器の材料として…、木材は各時代の要請に合わせて様々に利用されています。

建築材料

TN No.200 遺跡では、古墳時代の竪穴住居跡から柱などの木材が見つかっています。発見例こそ少ないものの、縄文時代以降、多摩丘陵の木材が建築材料として盛んに利用されていたことは想像に難しくありません。



TN No.200 遺跡の竪穴住居跡

炭の材料

炭は近世以降の大都市で日常的な燃料として広く普及します。特に百万都市の江戸における需要



は高く、多摩丘陵でもそれに応えるべく炭焼きが盛んになります。TN 遺跡群では、多くの遺跡で炭を作るための炭焼窯が見つかっています。

TN No.406 遺跡の炭焼窯

木器の材料

多摩丘陵における木器生産は古墳時代以前にも認められますが、奈良時代になると国府の整備に伴って轆轤を用いた製品が現れます。国府が衰退する平安時代になっても、地域の有力者たちによって木器作りは続けられました。丘陵の木々はこの長期にわたる木器製作を支えた重要な恵みでした。

作りかけの木器

TN No.243・339 遺跡から見つかった8～10世紀（奈良・平安時代）の溝からは「作りかけ」の木器が大量に出土しました。この周辺で木器づくりが行われていた証拠であると同時に、当時の木器の作り方を知ることができる貴重な資料となっています。

轆轤を使った皿の製作過程			削り抜いて作る椀の製作過程				
	1. 型打ち	2. 轆轤で挽く	3. 完成	1. 荒木取り	2. 型打ち	3. 中打ち	4. 完成
表							
裏							
側・断面							

轆轤のツメが付いた部分を削って… 皿の形が完成

製鉄・鍛冶

多摩丘陵では、古墳時代以降、鍛冶関連の遺跡が見つかるようになります。鉄の原材料こそ採れないものの、炭の材料となる木々、谷を流れる川、炉を作るための粘土など、多摩丘陵には製鉄・鍛冶を行うにあたり好適な資源が揃っていました。



大型羽口
平安時代
TN No.390 遺跡
(八王子市別所)



羽口
平安時代
TN No.37 遺跡
(多摩市愛宕)

精錬（大鍛冶）

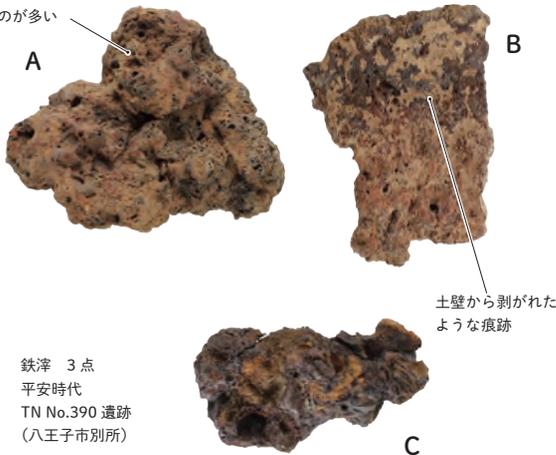
この大きな円錐形の土製品は、「羽口」と呼ばれる炉の通風管です。どうしてこんなに大きいのか、その理由は未だ解明されていませんが、この羽口と共に出土している鉄滓や鉄塊の分析から、この遺跡では鋼を生産するための精錬（大鍛冶）が行われていたと考えられています。

鍛造・鑄造（小鍛冶）

多摩丘陵では、製品を作る鍛造や鉄製品の修繕といった小規模な鍛冶が各地で行われていました。上に掲載した小さなほうの羽口は、鍛冶関連遺構の見つかっている遺跡で出土したもので、羽口としては一般的なサイズのものでした。

製鉄に関する鉄滓

羽口の先端に付くものが多い



鉄滓 3点
平安時代
TN No.390 遺跡
(八王子市別所)

土壁から剥がれたような痕跡

鍛冶に関する鉄塊

(右) 鉄鏃
平安時代
TN No.5 遺跡
(稲城市長峰)



(上・右) 鉄塊
平安時代
TN No.125 遺跡
(八王子市松木)

鉄滓（鉄のカス）は、鉄をつくる際に生まれたものです。Aは羽口先端に付くものが多いことから炉の底に溜まったもの、Bは片面に土壁から剥がれたような跡があるため炉壁に薄く付いたものであると考えられます。CはAやBより鉄分を多く含むことから、銑鉄塊である可能性もあります。

TN No.125 遺跡では鍛造の際に出たと思われる細かな鉄片や、上に掲載したような鉄塊が住居跡内から出土しています。多摩丘陵で見つかる鉄製品には右上に掲載した鉄鏃の他に、常設展示中の馬具、鉄剣、鋤先などがあります。

近世以降、そして現代へ

Modern era to the present days

近代以降の科学技術の発展によって、人々は土地に縛られることが少なくなり、これまで見てきたような丘陵の個性も影を潜めたかのように見えます。

一方で、注意深く見てみると、比較的新しい時代にあっても多摩丘陵がこれまで見てきたような3つの顔（「境」「道」「恵」）をふいに覗かせる瞬間を見つけることができます。

The ties between people and the land have become weakened in the modern times, and as a result, the characteristics of Tama Hills as we have seen so far seem to have disappeared at a glance.

However, if you look carefully, you can find moments when Tama Hills suddenly reveal their unique faces even in these relatively new eras.

神奈川から東京へ

多摩丘陵のほとんどは江戸期まで武蔵国に属していましたが、明治期の廃藩置県後、一転して神奈川県（旧・相模国が主体）に属することとされました。

ところが明治26年には現在の多摩地域全域が東京府に編入されることになり、現在に至ります。「境」という特質が近代になって再び顔を出したと言えるかもしれません。



明治26年に神奈川県から東京府へ編入された区域(緑色)を現在の都道府県域と重ねて示した。★

ニュータウンの建設

1960年代以降、高度経済成長に伴う住宅難の解決策として、多摩丘陵にはニュータウンが建設されます。東京都心からほど近く、現代の開発の手が及んでいなかった多摩丘陵。近代的な住宅の供給を望む人々は、広大な土地を「恵」と見たのです。



多摩ニュータウン位置図 ★



現在の多摩ニュータウン (愛宕から多摩センター駅方面を望む)

欧米への「道」

幕末以降の丘陵には、遙かな西、欧米への「道」が開かれました。

開国以降、生糸（シルク糸）は主要な輸出品となりました。多摩丘陵で紡がれた糸を、江戸時代以降織物業の盛だった八王子から横浜までつなぐ「絹の道」が栄え、鉄道の開通によって廃れるまで丘陵に繁栄をもたらしたのです。

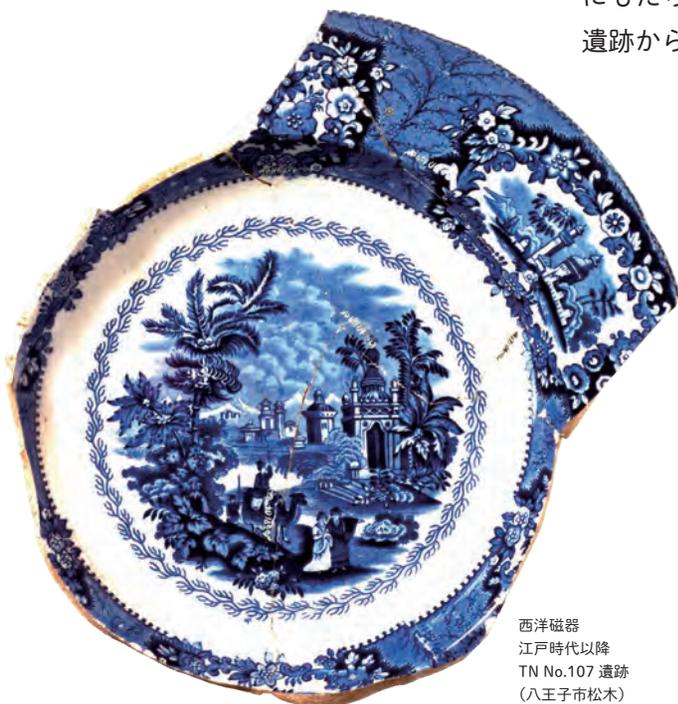


横浜から八王子までの「絹の道」

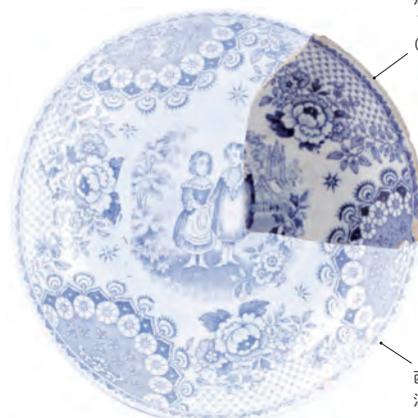
『横浜周辺外国人遊歩区域図』（横浜開港資料館所蔵）を参考に作図 ★

丘陵にもたらされた西洋磁器

絹の道は生糸を送り出すだけでなく、西欧の文化を丘陵にもたらし役割も果たしました。八王子市松木に所在する遺跡からは西洋磁器が見つかっています。



西洋磁器
江戸時代以降
TN No.107 遺跡
(八王子市松木)



個人蔵の同柄完形品をもとに推定復元。

西洋磁器
江戸時代以降
TN No.671 遺跡
(八王子市松木)



西洋磁器
江戸時代以降
個人蔵

底裏プリント銘 "ORPHANS/BF"
"ORPHANS" は柄の名称。"BF" は "Boch Frères" の略で社名。

ていりめい 底裏銘



素地刻印
"P・REGOUT/3/MAASTRICHT"
"P・REGOUT"(ペトルス・レグー)は社名。
MAASTRICHT(マーストリヒト)はオランダの地名で、ペトルス・レグー社の本社工場があった。



プリント銘
"ORIENTAL/MAASTRICHT/PETRUS REGOUT"
ORIENTALは柄の名称で「東洋の・東の」の意だが、描かれている風景は中東風。

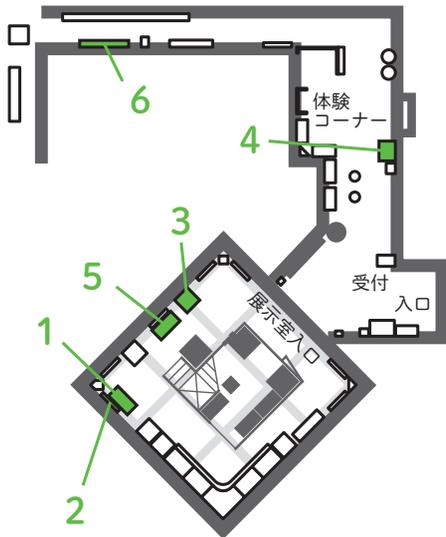
上に掲載した西洋磁器のうち、左はオランダのペトルス・レグー社、右はベルギーのボッホ・フレール社の製品です。ペトルス・レグー社は19世紀後半にアジア向けに盛んに輸出を行いました。ボッホ・フレール社は現在でも高級陶磁器メーカーとして知られるビレロイ & ボッホ社がベルギーに建てた工場がもとになっています。

合わせて見たい常設展示

Related
Permanent Exhibition

今回の企画展示のテーマに関連する常設展示を紹介します。ぜひ館内を探してみてくださいね。

ここで見れます (数字は写真番号)



黒曜石製の勾玉

TN No.939 遺跡から出土した
黒曜石製の勾玉です。黒曜石は鋭
い切れ口を活かし、刃物として利
用されることが一般的な石材で、
勾玉に加工されるのは、全国でも
これが唯一の事例です。

蛍光X線分析の結果、長野県
和田峠産の黒曜石であることが判
っており、弥生時代以降にも多摩
丘陵と信州を結ぶ「道」がどこか
にあったことを物語っています。



写真1 黒曜石製の勾玉

東海地方からの搬入品

この甕は5ページで紹介した古墳時代
初頭の高坏と同じ、多摩丘陵西端のTN
No.916・917 遺跡から出土したものです。
縁の部分が「S字」のように屈曲している
ことから「S字甕」と呼ばれ、もともとは
伊勢湾岸地域で成立した土器です。高坏と
同じく、東海地方周辺から運ばれてきたと
考えられます。



写真2-1 S字甕

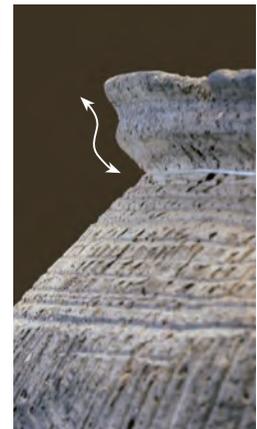


写真2-2 S字の縁

平安時代の鉄製品

鉄器生産が盛んであった平安時代の馬具
(轡)と鉄鍬です。村落で行われていた鍛冶
に関連する遺物と考えられています。奈良
時代から平安時代にかけて緩やかに出土数
の増える農具に比べて、これらの武具・馬
具は平安時代に急激に出土数が増えており、
この時期に手工業生産が活発になったこと
を示しています。



写真3 平安時代の鉄製品

TN No.513 遺跡の模型

11 ページで紹介した TN No.513 遺跡の模型です。初めは中世の大丸城の復元模型が表に出ていますが、スイッチを押すと奈良時代の瓦生産の場面に切り替わり、斜面を利用した窯が操業する様子を見ることができます。右の写真に映っているのは西側の斜面で、国分寺創建期の瓦を焼いていた窯がありました。反対側の東側斜面の麓には、工人たちが利用したであろう竪穴住居跡も見つかり、模型でも再現されています。



写真 4 TN No.513 遺跡（奈良時代）の模型

粘土採掘坑に関連する展示

TN No.949 遺跡で見つかった、古墳時代の粘土採掘坑に残されていた草鞋（写真 5-1）は、ぬかるみに足を取られて草鞋だけが残されたものと考えられています。木製の鋤の柄（写真 5-2）も粘土採掘坑から出土しており、これも粘土採掘に用いられた道具と推定されます。

体験コーナー奥の廊下には、10 ページで紹介した TN No.248 遺跡にある縄文時代の粘土採掘坑の土層剥ぎ取り標本を展示してあり、その規模を体感していただけます（写真 6）。腰をかがめた人のイラストが収まっている、U 字形に濃い色の土が入っている部分が 10 ページの写真にある「採掘坑 B」です。これは明るい色の土を断面 U 字形に削り抜いた穴に、濃い色の土が堆積した状況を示しています。特にこの遺跡では、粘土層の乾燥を防ぐために、縄文時代の人々がすぐに穴を埋め戻していたとも推測されています。



写真 5-1 粘土採掘坑に残された草鞋（右は現代のもの）



写真 5-2 粘土採掘坑で発見された木製の鋤柄



写真 6 粘土採掘坑の土層剥ぎ取り標本



令和4年度企画展示『境・道・恵—多摩丘陵の3つの顔—』解説冊子

令和4年5月30日発行

編集・発行 公益財団法人東京都スポーツ文化事業団 東京都埋蔵文化財センター
〒206-0033 東京都多摩市落合1-14-2 電話 042-373-5296

印刷 前田印刷株式会社

表紙及び裏表紙は国土地理院のウェブサイト提供の航空写真・基盤地図情報を用いて作図・加筆しました。